

今年(二〇一五年)は、敗戦から七〇年の節目の年であり、私達の学年(二九期生)にとっては古希を迎える年でもある。誕生したときが、八月一五日の以前であろうと以後であろうと、食料不足が続く戦後の混乱期を両親達が頑張って育ててくれたおかげで今あることを思うと感謝に耐えない。

さて、小学校入学の時にはすでに講和条約が発効し、日本が独立した後だったが、親に連れられて大阪の町に行くと、MPの腕章を巻いた米兵の姿を見たような記憶がある。傷痍軍人の姿も見た。傷痍軍人は白衣を着て、アコーディオンなどを演奏していたりした(昭和四〇年代まで見かけたが、中には偽物もいたのである)。そう、百貨店にPX(米軍購買部)があったのも見たような気がする。

小学校では、戦争の話をしてくれた先生もいたが、ほとんど記憶にない。ただ、六〇年前にも戦争があつ

教科書には載っていたものの、そこを詳しく教えてもらった記憶はない。ただ、ソ連が日ソ条約を守らず侵略してきて多数の抑留者がでたということは教えてもらったようだ。

中学三年の時の修学旅行は昭和三十五年六月三日から五日で、箱根・東京方面で、国会議事堂の見学も組み込まれていた。最終日の五日に国会議事堂を見学している。その一〇日後、学生のデモ隊と警官隊が衝突し、樺美智子さんが圧死するという事件が起きた。

その同じ年の十月、浅沼稲次郎社会党委員長が一七才の少年によって、公開討論会の演壇で刺殺されるといふ衝撃的な事件が起きた。このことから政治や社会に目を向けるようになっていったと思うが、高校時代はそれほど身近にも感じなかった。

大学時代は、ベ平連の時代であった。アメリカがベトナム戦争に介入し、北ベトナムに空爆するのに、日本の米軍基地にいた軍用機が使われ、武器弾薬の材料が日本で調達されているということから、日本が戦争に巻き込まれるという不安がもたらした運動であった。大学内でも、学生運動のほとんどは関与していたように思うが、母校では学費値上げに反対する学生運動が

たという話をされた先生がいて、それは日露戦争のことだった。今より明治時代が近かったのだと改めて思われる。小学校時代で戦争を意識させられたのは、廊下に張られていたニュース写真で、広島に落とされた原子爆弾の被害写真で、「石の階段に写し込まれた犠牲者の影」というものだった。多分昭和三〇年代にあって、広島原爆に関する報道が解禁になって、当時の写真が明るみに出てきたものだろう。一瞬にして、人が蒸発しその形が影となって石に焼き込まれるという衝撃的な写真であった(詳細はこの通りでないかも知れないが、自分の記憶ではこうなっている)。

それよりも、ラジオである。子供心に残っているのは、NHKで放送されていた「尋ね人」のコーナーで、そこでは外地からの帰還者や戦災で家を失ったり、行方不明になったりした人の安否情報をラジオで問いかけるというものだった。また、時々戦犯とされた人が処刑されたニュースも記憶している。それは山下奉文大将のことだと思っていたが、山下大将の刑死は一九四六年だったので、後になっての情報と取り違えていたようだ。

中学・高校時代においては第二次大戦のことは、

活発化し、産学協同反対という立場から共感する学生も多くいた。明確に意識しないまでも、学生運動に賛同するいわゆるノンポリという集団も生まれた。東大をはじめ各大学で次第に過激な学生運動が展開され始め、全学共闘会議(全共闘)が組織され、そのもとで全額バリケード封鎖などが起こるようになった。意識するもの達が先鋭化する方向に進みはじめると、次第に一般学生も離れ始めたが、それでもデモに加わる学生もいた。学園は次第に荒廃しはじめ、学生・教師の間も不穏になっていった。

結局、紛争大学の多くはそれまで極力避けていた警察権力を学内秩序回復のために導入せざるを得なくなった。しかし、この紛争の中でも、ベトナム戦争の影響は大きく働いており、授業料の値上げは資本家・アメリカに追随するものだという議論があった。ベトナム戦争、沖縄返還と沖縄の基地問題もそれにかかわっていると理解されていたといえるだろう。米国の艦隊が日本に寄港すると必ず反対のデモが行われるということもあった。

私自身にとって、大学紛争の時期は三年から四年になるときであって、全共闘の主張には懐疑的な立場だ

った。そのため、全共闘に走った学友から白眼視されたようだ。このときには大学が壊滅するのを避けたいという思いはあったが、正直するべきすべもなく、ゼミの連絡だけは続けたいと思っていた。機動隊が入って、学内の整備が進み、セミの声を聞くころに新学期が始まったが、校舎には機動隊が発射したガス銃の臭いが残っていたり、バリケード封鎖の間にバリケードに立てこもっていた学生達が壁に書いた落書き（アジテーション）が残っていた。ただ、この間に若手・中堅の教授・助教授たちとの接触が、その後の学生生活に大きな影響を与えてくれたと思う。大学院に進んだのも、その結果である。

大学院の博士課程に進んだころ、兵庫県のカ西市史の編集にくわわり、一方では短大と高校の非常勤講師をするようになった。そして母校の大学の非常勤講師をするようになったころ、新修大阪市史編纂の計画が発表され、後にその任意団体である大阪市史料調査会の調査員になった。昭和五十四年のことである。それから現在に至るまで新修大阪市史編纂事業に関わっていることになる。

新修大阪市史編纂の史料収集の過程で、戦争関係で

く話し合えることによって、得られるものも多い。その中で、かつて一瞥しただけで深く読むこともなかった「きけわだつみのこえ」再び目の前にすることになった。木村久夫氏の文章にである。母校である千二からこういう人が卒業していたのかと思うと、その思想を顕彰したいと思うようになった。今回、「真実のわだつみ」を読んで、さらにその念が強くなった。

歴史の分野では、基本的なこととして、宗教が関わる戦争は長期化し陰惨になると考えている。日本人は宗教は寛容であると考え、西洋や中東では、一神教であることが原因してのことからか厳格で厳しいものである。現在中東・北アフリカで繰り広げられている自称「イスラム国」の言動は目を覆うものがある。宗教ばかりでなく、政治も日本は緩いのではないかと思う。日本らしいといえればそれまでだが、日本人はやもすれば調子に乗りやすく、それが講じてかつての戦争を引き起こした。冷静に厳格に将来を見据える人材ができて欲しいものである。木村久夫氏のように。

*「尋ね人」の時間は、昭和二十一年七月一日〜昭和三十三年三月三十一日まで放送されていた。

おわり

二つの出会いがあった。一つは大阪大空襲の体験画である。大空襲にあった人達が当時の体験を、クレヨンなどで大判の画用紙に描くものだが、画家である人はほとんどいないので、稚拙な、一見子供が描いたような絵であるが、画面からは恐ろしいばかりの迫力にじみ出ている。

もう一つの出会いは、旧陸軍真田山墓地である。こは日本で最初に作られた墓地というばかりでなく、戦前の様子を今に残す希有なそんざいである。そして、誤解されがちだが、陸軍墓地は戦死したものだけを葬っているのではなく、平時においてなくなったものや捕虜で死んだ人、軍役に携わって死んだ人も同じように葬られているのである。もっとも、兵卒と将校の墓石には格差がある。兵卒は厳しく寸法が決められているが、将校にはそれはない。よって将校の墓石には数トンもあるようなものもある。

この陸軍墓地の墓石等の調査をすることによって、いろいろなことを学ばせてもらっている。軍と国民との関わり合いも含めてである。

さて、「ここ数年「ちきと会」に関わるようになって、また新しい出会いが増えた。先輩や後輩の皆様と親し